

4. 大和川にかかる橋 その1 新大和橋

新大和橋は、藤井寺市舟橋町と柏原市上市にまたがって、明治7年に架けられました。大和川付け替えから170年後のことです。現在は、全長204m、幅員2mの大和府道802号八尾河内長野自転車道線自転車・歩行者専用道路で、大阪府富田林管理事務所が管理をしています。架橋当時からほとんど同じ大きさで、位置も変わることなく、人道として今日まで継続している橋は多くありません。地元の人たちが大変な苦勞をして橋を架け、郷土の誇りとして大切にしてきたからではないでしょうか。苦勞して架けられた様子は、柏原市史第三巻に詳しく当時の架橋に係わる資料が第五巻に多く収録されています。

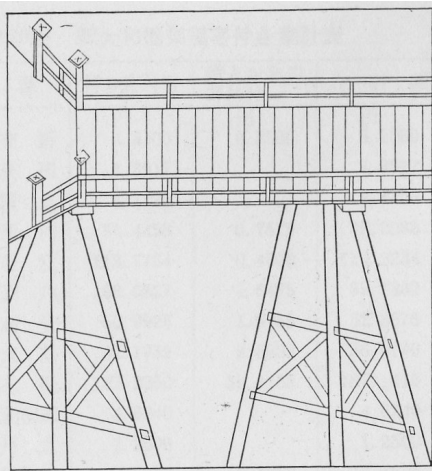


架橋の願い

船橋辺りには、河内国府があったとされ、東高野街道、奈良街道、長尾街道が交差し、古くから交通の要衝でした。しかし、これらの街道は、いずれも大和川と石川に遮られ、洪水になると船留になり、急用のある人は大変困っていました。明治になると、人や物の流れが活発になり、付近の村人たちのみならず大和・河内・摂津の広範囲の村々からも橋を架ける願いが起きました。しかし、明治の初め頃は、道路や橋の整備費は原則として地元各村の負担でしたので、この辺りの貧乏な村々では到底自力での実現は不可能でした。それで、そのままになっていたのです。

地元負担で掛けられた橋

明治6年5月、堺県は、通行難渋の場所には早く架橋するよう布達しました。上流の柏原村に国豊橋も架けられ、河内周辺の県道整備も進んできたので、明治6年11月、柏原村、舟橋村、国府村、弓削村、市村新田、田井中村、道明寺村の各戸長が発起人となり、県に『架橋御願書』を提出し、大和川に橋を架ける工事を行うことになりました。架橋費用は全て「他力勸進」、即ち地元負担で賄わなければなりません。発起人は、架橋の許可があると直ちに、『新架橋勸進帳』に橋の完成絵図を添付して、各村に寄付を募りました。



第10図 新大和橋の図（部分）（柏原市史）

大和橋の架橋を利用

寄付金が集まっても新木材を買い入れての新築の架橋は困難でしたので、その資金調達に苦慮していました。その頃、下流の堺の大和川に架かっている大和橋は、腐朽がおびただしくなったため、仮橋を作って付替え工事を行っているところでした。完成すれば工事中に使用した仮橋はいらなくなることを知り、堺県に『御願書』を願い出、仮橋の払い下げを嘆願しました。ところが、すでに落札済みでしたので落札人に手数料を上乗せして、ようやく払い下げを受けることができました。この仮橋の腐朽部分を取り除き、不足木材を補い、堺の業者が新橋建設工事を請負うことになりました。

新大和橋完成

こうして、明治7年1月末着工、一ヶ月後の2月末に完成。長さ108間(196.4m)、幅一間半(2.7m)、高さ2間半(4.5m)、両手摺付で、県より新大和橋と命名されました。この名前は堺の大和橋との関連が意識されているといわれています。工事費総額は、約823円。そのうち約9割は寄付金で集まりましたが、残りの1割は、県からの寄付と世話人が追加の寄付をして、なんとか決済をしました。

かさむ維持・修復費用

完成後の新大和橋は、架橋工事にも増して、その維持のために苦労しました。新しい橋が架かってから2カ月も経たないうちに、牛車や荷車が重荷を積んで通行するため、橋板には穴があき、手摺が壊れるなど損傷が著しくなりました。明治10年、県へ届けた『橋梁修繕願』には、「渡船が流され橋枕にひっかかり、橋梁が6間(11尺)にわたって流された。また、ある時は、橋板の破れ目より馬が落ち、馬は助けられたが、27間半(約50尺)にわたって橋板が破損した。」など、暴風雨によって洪水が発生し、大破した橋の様子が生々しく報告されています。

五日間だけの有料橋

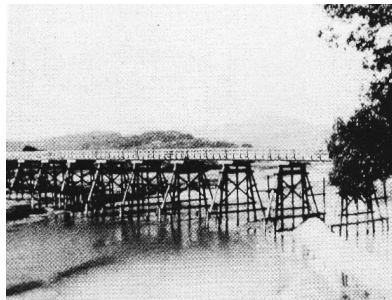
完成後から明治12年までの5年間、橋や堤防の修繕費用の工面に世話人は苦労しました。村々に追加の寄付を募りますが、赤字は積もるばかりで、その都度、借入れたり、世話人たちが負担したりしました。修繕は度重なり、その費用の借入金のかさむいっぽうで、返却の見込みも立たず、困った世話人は、明治10年5月、橋の通行人から補助金を

徴収することを県に願い出、許可をもらいました。そして、明治 10 年 6 月 10 日から徴収を始めました。しかし、通行人が少なく、補助銭の収入が少なすぎ、これでは修繕費用の見込みもたたない、と同月 14 日、僅か五日間で徴収を中止しました。その年の明治 10 年の収支を記録した『新大和橋営繕入費書上書』によると、「道路銭取建札」、「取立候番小屋」、「取繕人足 5 人の日当」などの支出も多く、結局、この年も赤字でした。世話人たちは、修繕の都度、県に対し費用の捻出の苦勞を訴えていましたが、やっと明治 13 年から、官費による修繕が実現しました。村人たちは安堵しました。こんなに苦勞して架けた橋ですから、新大和橋は、村や郷土の誇りであり、橋から眺める景色の良さは村の名勝であったそうです。

(2015/12 勝部)



明治 31 年頃



昭和初期

(参考文献)

『藤井寺市史第九巻資料編七』 1978

『柏原市史第三巻』 1972

『柏原市史第五巻』 1971

『河内の街道物語』 1987、柏原市

『八尾、柏原の 100 年』 1995、郷土出版社